

# 放送人の会

## 「放送人の証言」収録状況 (1999)

### ・収録済みの方々

氏名	内容	収録取材者
辻 好雄 作本 秀信	BKラジオドラマ草創期からの音響効果マン	斎明寺以玖子 久野 浩平 示野 浩示
高橋 太一郎	GHQ、民放開局の裏面史 元、TBSチーフディレクター	大山 勝美 村木 良彦
岡本 愛彦	NHK〜TBS〜フリー テレビドラマ演出家としての歴史 「私は貝になりたい」など	吉永 春子 村木 良彦
西沢 実	昭和20年〜30年代のNHK、ラジオドラマの企画、架空実況中継ドラマなど	斎明寺以玖子 上田 洋一

### ・収録予定の方々

氏名	予定内容	取材者
吉田 直哉		今野 勉
国枝 忠雄		野崎 茂雄 仲佐 秀雄
秦 豊	NHKレッドバードと民間放送開局 「ひとりっ子事件」 ニュースキャスターの先駆者	久野 浩平 村木 良彦
田 英夫		金平 茂紀
吉村 繁雄	大阪、民放の初期事情 OTVのことなど 元、ABC副会長	澤田 隆治 11/19 (収録予定)
藤倉 修一	社会探訪 「楽町のおとき」を中心に当時の世相と 番組の反響など (11/25 収録予定)	各務 孝
長沢 泰治		各務 孝

### ・今後、取材したい方々

堀江 史朗	八橋 卓 (元ANBディレクター)
北川 優	浅田 孝彦 (NETモーニングショー 企画者)
梅本 重信	
川口 幹夫	木村 栄文
和田 勉	せんぼんよしこ
森川 時久 (元CXディレクター)	荻野 慶人 (元YTVディレクター)

放送文化基金の助成を受け

## 「放送人の証言」取材進む

あなたの参加をお待ちしています

「放送人の証言」は、「放送人の会」

発足当初から事業計画の一つの柱として、今年三月にこの事業に対して放送文化基金の助成がおこなわれたことになり、財政的な裏付けができたため本格的な活動が始まっています。この「放送人の証言」は、一九五〇年以降の放送番組の革新(ソフト・イノベーション)にかかわった現場の制作者たちに、当時の現場の動きや番組実現までの経緯などを語ってもらい、それを録画、保存して放送文化の足跡を記録し、先達た

ちの業績を整理して、これまででなかなか整備されなかった放送文化の継承のための回路を作ろうというものです。具体的には、会員の皆さんが取材すべきだと考える人を推薦し、実行委員会の承認を得て自分で取材(インタビュー)するという方法を取っています。四月にNHK大阪局でラジオ、テレビのドラマの草創期から活躍してこられた音響効果の草分け、作本、辻のお二人のお話を収録することから始めて、別表のように着々

と進行しています。いずれも、放送とは何かと問いつづけてきた先輩たちのさまざまな思い出や意見が述べられている貴重な記録になっていきます。取材は家庭用デジタルカメラを使用、取り敢えず編集しないで取材テープをそのまま保存蓄積することで、今後の自由な利用に対応できるようにしたいと考えています。取材に当たっては、語り手のお話をできるだけ多角的に聞くため、取材者は複数である方がいいのでは、と考えていますが絶対条件ではありません。取材対象のみなさんには若干の謝礼を差し上げることにしています。勿論、機材費、交通費などの実費は実行委員会で負担いたします。初夏の頃に会員の皆さんからアン

ケートで提案いただいた人々のうち、ご高齢の方から先に取材を実施させていただいておりましたが、これからは、「いま、この人の話を聞いておきたい」という取材対象者のお名前を事務局までお寄せくださるようお願いいたします。

## 「研究シリーズ・放送人の世界」その2

### 昭和30年代のテレビ

吉田直哉の「日本の素顔」  
石川 甫の「マンモスタワー」

「研究シリーズ・放送人の世界」その2 (1999)  
昭和30年代前半のテレビ：人と作品

吉田直哉の「日本の素顔」  
10作品一挙上映  
ドキュメンタリー

昭和32年〜35年

石川 甫の「マンモスタワー」  
10作品一挙上映  
ドラマ  
参加型  
ドキュメンタリー

「あざのある女」  
「あざのある女」  
(脚本 矢野龍二)

会場 渋谷ビデオスタジオ  
東京都渋谷区千駄ヶ谷4-1-10  
Tel. 03-3464-5611

協賛 東京放送 協賛 日本放送協会

東京タワーが竣工した昭和33年、石川甫はその巨大さに感動されて「マンモスタワー」を作った。それはその後の映画とテレビの行方を暗示する歴史的な作品となった。  
「Q」は神山徳司のテレビシナリオ第1作。

12月4日(土) 13時〜17時  
「Q」「あざのある女」

12月11日(土) 13時〜17時  
「マンモスタワー」  
そのあとシンポジウム  
(志賀信夫、大山勝美 ほか)

11月20日(土) 13時〜17時  
「日本人と次郎長」  
「南の孤島・与論島」  
「迷信」「アンバランス」「テキ屋」

11月27日(土) 13時〜17時  
「ある玉砕部隊の名簿」  
「隠れキリシタン」「泥海の町」  
「飯ばさみ」「土地崩壊」

「放送人の証言」と並ぶもう一つの中心事業である「研究シリーズ・放送人の世界」は、昨年六月から七月にかけて連続六回で「牛山純一／上坪隆の人と作品」を開催して好評を博しましたが、今回は昭和三〇年代のはじめ、「テレビの時代」の幕開けを飾った二人の制作者、ドキュメンタリーの吉田直哉氏とドラマの石川甫氏を取り上げます。吉田氏の作品からは「日本の素顔」の十作品、石川甫氏の作品からは「マンモスタワー」など三作品を選んで一挙に上映、それぞれシンポジウムをおこないます。年配の方々にとっては懐かしい作品、若い人たちにとっては一度は見たいかと思っていた作品だろうと思います。こういう機会でもなければなかなか見ることのできない優れたテレビ作品を紹介するのも、この会の使命の一つと考えています。会員の皆さんもこのチャンスを生かして、二人の先輩制作者の作品に触れてみてはいかがでしょうか。

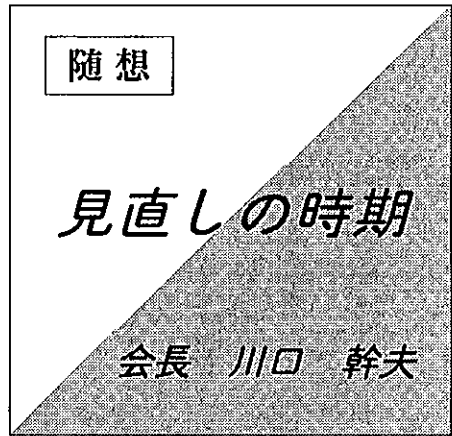
願っています。カメラ、マイクなどの機材、技術者については、充分とは行きませんが、事務局でお話することが出来ます。どうぞご遠慮なくご相談ください。会員の皆さんの積極的な参加をお待ちしています。

韓国ではこれまでハングル文字のみであった文章表現を、漢字まじりでもいいと改めるといふ。一昔前までは韓国の新聞を見るとハングルだらけの中にチラホラと漢字がまじって私など「はア、こんなことをいつているのだな」とうなづいたりしたものだ。

ところがこのところ急速にハングル化が進んで、印刷物は勿論のこと、看板にも標識にも一切漢字が使われなくなった。恐らくその反動なのか金大中氏の一つの考え方なのか、必要があればハングルの中に漢字を交えていくということになるそうだ。

日本の文字は日本語を漢字で表現する「万葉仮名」あたりに見られるように漢字での表現を中心とし、のちに片カナ、平カナが出現

して今その三つが入り交じってまこと自由に使われている。この頃では英語を主とする外国語も自在に使われ、歌の題名などカナ書きをやめて



いきなり原語がまかり通っている。グループの名前も横文字が多い。本家の中国では従来の漢字を誰でも使える文字にしたいというので簡

### 第2年度に入った「放送人の会」

#### 会員総会が開催されました

すぐにご報告しなければいけないのですが、会報担当の一人老年の怠慢で会報の発行がのびのびになり、総会についてご報告するタイミングを逸してしまいました。申し訳ありませんでした。

創立総会（九七年二月一日に行われた）につづく第二回の会員総会は、その際にお知らせした予定通り、今年の四月二十四日（土）に、東京四谷の主婦の友会館ホールで行われました。

出席した会員は四〇名程でしたが、なごやかな雰囲気の中で進行し、予定の議事を終えました。

（ご報告が遅くなっています）

川口幹夫会長の挨拶の要旨は次の通りです。「多メディア、多チャンネルの時代を迎えて、放送の業態が大きく様変わりすると同時に、大小の放送が乱立するなかで、放送の使命、放送の本来あるべき姿もいよいよあいまいなものになるだろう。こういう時こそ、放送を愛し、放送のあるべき姿を考えつづける集団として、放送人の会の意味は重い、と考へる。若い会員の参加を促し、会の活動が着実に発展することを期したい。」

活動報告、会計報告に続いて幹事の改選が行われ、旧幹事から四名が

体化が進んだ。「云求」——なんのこともかと思つたところが「芸術」の中心部分だけとり上げた猛烈な簡体化である。

ここまで漢字の簡略化が進むと、こんどは中国では昔の漢字による書物が読めない人がふえてきた。何とかせねば……それが漢字の国、中国での大問題だといふ。

日、中、韓、三つの国に於ける漢字の使い方一つとっても、どうやら大きな見直しの時期にさしかかったようだ。

ゆきすぎはどうやら及ばぬことになったようだ。この辺で見直して、ほどほどにその昔の先祖の財産が生かすようにしなければならぬ。これは漢字の問題だけではあるまい。広く表現の問題なのだと思う。

退任、新しく四名の方が選任されました。新幹事団は次の通りです。

- 石高健次（新任）
- 磯野洋子
- 大山勝美
- 木村栄文
- 今野勉
- 金平茂紀（新任）
- 斎明寺以致子
- 田原茂行（新任）
- 塚越恒爾（新任）
- 野崎恒茂
- 久野浩平
- 平原日出夫
- 堀川とんこう
- 村木良彦
- 吉永春子

### 紹介

## 「放送人いかにあるべきか」

ケーススタディ集の趣き

クロンカイトの自伝

二〇世紀を代表する放送人とよんでいいのではないか。これがW・クロンカイトの自伝『クロンカイトの世界』（TBSブリタニカ）を読んだあとの確信に近い感想である。はじめ訳書の標題をみたとき、誰がクロンカイトの評伝をかいたのかと一瞬思った。カバリの字を追い、中を繰ってみると完全な自叙伝だとわかった。原題は「あるレポーターの生涯」である。

五〇〇ページにも及ぼうという大冊のすべてが、幾百のエピソードで綴られているのはびびくりした。論文調のところはまったくない。この卓抜な記憶力はどういうことか。執筆にあたっては、例によってウラをとっただろうが、その復元作業の緻密さに敬服せざるをえなかった。この本は著者八〇歳のときに出版された。

るぎない名声、地位を手にするが、クロンカイトは「普通の人」に徹して生きた。エリートとして振舞うことを頑なに拒んだ。ジャーナリストとしての倫理観の底にあるこの頑固さが彼をささえとおしたといえよう。それにしても、ペイリー、スタントン、サラントなどCBS経営者が一団となって彼を盛りたて援護してくれたことを明記している。よい経営者に恵まれて彼の資質と努力が実を結んだといえそう。ほほえましいのは随所で失敗談をやらかしている点。偽善にならない程度に、しかし具体的にかき残した。ジャーナリストは失敗を重ねて伸びてゆくのだと言わんばかりだ。放送人いかにあるべきかの、ケーススタディ大集積である。

（野崎 茂）

## 「文化としての放送」を 創り手はこう考える

幕張で公開シンポジウム

幕張メッセで開催される国際放送機器展（InterBEE 99）の二日目に、放送人の会の協力で番組制作者によるパネルディスカッションが行われます。主催者の呼びかけをご紹介します。

今年も11月18日朝は、幕張メッセに集まろう！  
～21世紀の「放送」に何が期待できるか～  
番組というソフト創りに命を賭ける制作者の旗手三人が、それぞれの分野での実践最新情報と制作者魂を熱く披露する大ディスカッション・第二回

◇11月18日（木）午前10時半～12時半  
◇於 幕張メッセ 日本コンベンションセンター  
国際会議場2F 国際会議室  
（JR京葉線・海浜幕張駅下車）  
◇挨拶 川口幹夫「放送人の会」会長  
◇パネル・ディスカッション

- 村松 秀（NHK科学番組ディレクター  
環境ホルモン問題）
  - 杉田 成道（フジテレビ・ドラマ演出家  
「北の国から」「少年H」）
  - 今野 勉（テレビマンユニオン・ドキュメンタリー  
&ドラマ演出家・脚本家/会幹事）
- コーディネーター  
迫田 朋子（NHK解説委員、生命医療特集・  
インターネット制作キャスター/会員）